

古民家の移築再生

職人技がなせる逞しい木架構を現代に甦らせる

佐々木文彦（建築家）



名取の家
宮城県名取市

西側から見る夜景。右手離れの土蔵は築100年のものを山形県鶴岡市から、左手母屋の古民家は築130年のものを宮城県黒川郡大和町から移築し再生している。コの字に配置して中庭に向かって開き、正面の玄関ホールで繋いでいる。

原点としての古民家

私の自宅兼事務所は石巻市北上町十三浜にあった。目の前に海、背後には山というリアス式の自然豊かな場所だった。東日本大震災で被災し、災害危険区域に指定され、もうここには住むことができないのだが、幼少期を過ごした自宅は、小屋裏に蚕棚があるような気仙大工がつくった築100年の茅葺き民家だった。古民家は私にとっての原風景といえる。

30年前、その自宅の建て替え話があった。再生を望んだ私の提案は叶わず、梁組の一部を再利用し現しでつくるのみの新築となったが、それでも解体工事が始まり茅を取り除いて骨組となった自宅を見た時、木の逞しい生命力と美しさ、昔の棟梁のセンスにすっかり魅了されていた。こうして古民家再生の仕事に多く携わるようになっていった。

しかし現状は、今のライフスタイルに合わない古民家特有の間取りや、隙間風が入ってくるような寒さから、建物は次々に取り壊され失われていくのが現実だ。特に東日本大震災以降、主に宮城、福島、岩手で全壊・半壊判定の出された古民家は、県や市町村から解体助成金が交付されたこともあり、より一層解体撤去され廃棄物になるケースが増えた。そのような中で、古い自宅に愛着をもち、修復を重ねながらも住みたいという建主に出会い、使い勝手のよい間取りで冬は暖かく過ごしたいと相談をいただくことがある。これからも住み続けたいと改修再生工事の決断をしてくださることは大変嬉しいことである。

古民家の再生には、大きく分けて「現地再生」と「移築再生」があるが、いずれも解体前の建物を屋根のカヤ葺きを取り除いて骨組みの状態にし、柱・梁・桁などの構造材の番付をし、材を採寸する。現地再生の場合、多くは骨組みを残した状態で基礎の補強工事、建物の傾き（水平・垂直）の修正、木部洗いと腐朽部分の取替えと補強などを行いながら再生していく。移築再生（または現地で全解体の上再生）の場合は、建物が組まれた順番と逆の工程で解いていき、部材は養生をして施工者の作業場や建築現場に運ぶ。複雑な小屋組は地組み（桁から上だけを仮組みすること）し、詳細を調査・検討する。その後、再度解体し現地へ搬入し再生作業を行う。

再生工事の一例として、「名取の家」の工事を担当した工務店の社長の話を紹介する。

——古民家の調査依頼を受け、職人達を連れて組み方の番付を始めた。組方の番付の順番だけでも1番から123番まであり、大きな梁・桁が交差した所には、同じ番付が10カ所もあった。どれが上でどれが下か、囲炉裏から上がった煙のすすけ具合で判断したくらいだ。こうして何とか手板（大工が墨で板に書く図面）まで書くことができた。

解体した古民家の古材を自社の土場に運び地組みを始めたが、大方の状況判断を見極めるのですらクレーンを使った。地組みの作業は、10名の職人で小屋組だけで20日を費やすこととなった。私は気仙大工の流れを汲む大工棟梁のひとりとして、今はなき匠たちへの挑戦の意味もあり、この仕事に取り組んだ。夜になり大工達が帰った後、ひと

りでライトアップをした地組みを見て、機械もクレーンもない時代に、よくぞこれまでにと身震いと同時に涙が流れた——

現在は、岩手県奥州市にある築135年位の古民家を、仙台に住む若い夫婦ふたりの新居にする移築再生工事を設計している。300×200mmのケヤキの大黒柱、当時の気仙大工による見事な梁組みと、スギ板戸・書院窓・欄間などの建具も状態がよい古民家だ。また、宮城県北部の若柳町に建っていた東日本大震災で被災した農家住宅は、診療所として東松島市の高台移転地の一角へ移築再生の予定。すでに、解体した古材を現地近くへ養生して仮置き搬入し、再生を待っている状態だ。私は、日本民家再生協会に所属しており、そこの「民家バンク」にオーナーの所有する古民家を登録したり、古民家を希望する建主に紹介したりしている。こうして民家を手放したいオーナーと、民家を欲しがっている建主との橋渡しをするのも、私の大切な仕事のひとつだ。新たな古民家に出会うたびに、当時の棟梁に笑われないような仕事をしなければと、気が引き締まる思いになる。

母屋のリビング。古民家ならではの太い梁架構を現しとした平屋で、天井高は約3.8～8.0mm。



建主は、東日本大震災で当時住んでいたRC造の住宅が構造的なダメージを受け、建替えを検討された。かねてより希望していた古民家の移築再生での住まいを夢見て、建主自ら山形県鶴岡市にあった築100年の立派な土蔵を手に入れた。私からは、宮城県黒川郡大和町の震災で被災した築130年の古民家を紹介し、2棟合わせて移築再生することが決まった。隣接地に建主の経営する診療所があり、長い間地域医療

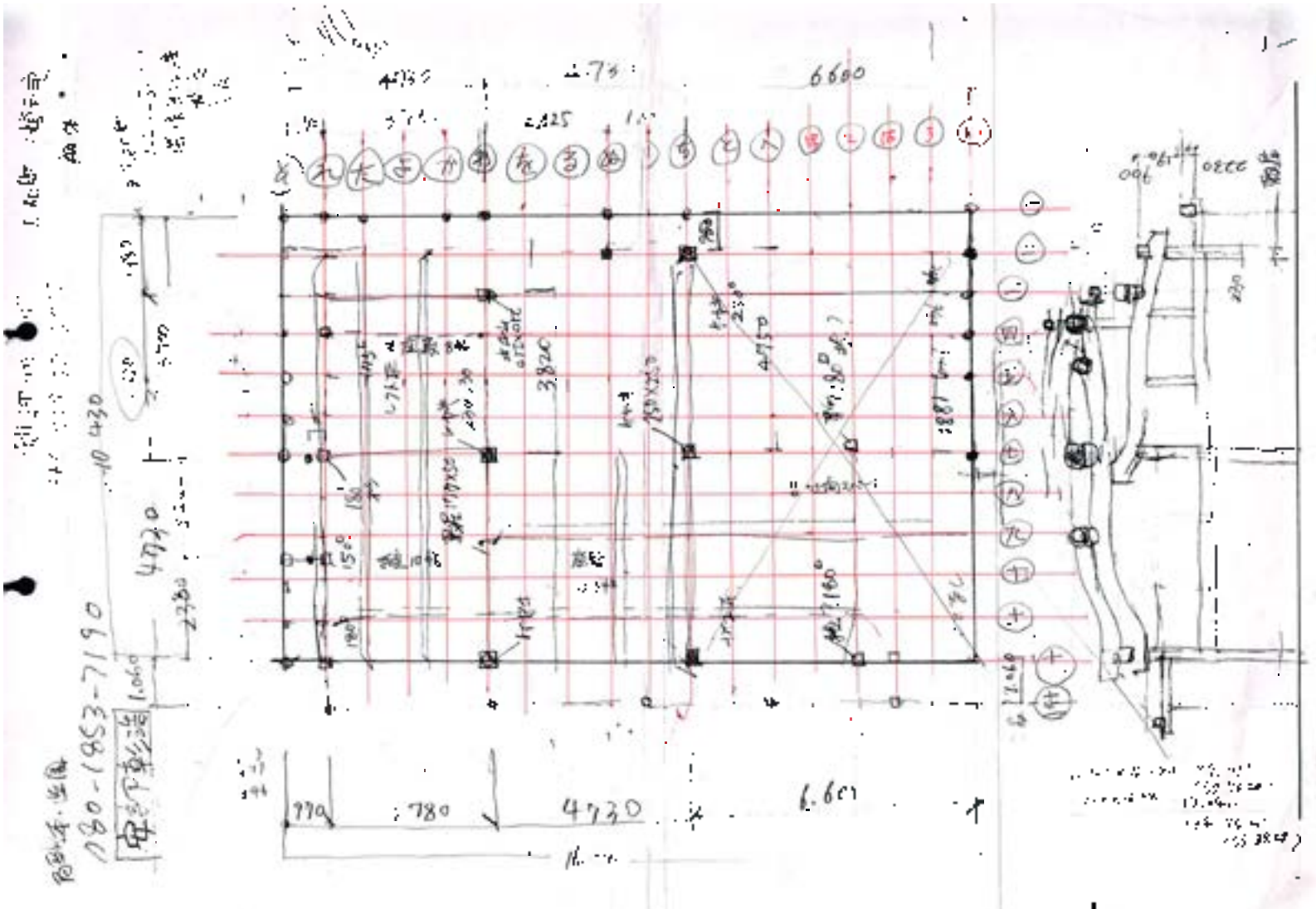
に貢献してこられたこともあって、**気分転換も兼ねてゆとりのある住まいが求められた。**

以前住んでいたRC造の住宅は、敷地の南面に道路と庭と駐車場があり、室内から庭を楽しむとすると外部から見えてしまう間取りだった。そこで、外部からの視線を気にせず、庭を眺められるよう建物をコの字型に配置し、中庭を設けた。中庭を挟んだ母屋と離れを玄関ホールで繋ぎ、母屋側（大和町の古民家）にドッグランを含む生活空間、離れ側（鶴岡市の土蔵）にゲストスパー

スを配置した。母屋、離れ共に平屋の計画とし、水回り、収納スペース以外は天井を設けず、梁現しの吹抜けとし、間仕切りに格子戸を多く使用して家全体に風が通り抜けるよう設計した。母屋北側は施工面積を減らし、コスト調整の意味合いも兼ねて、ドッグラン用の下屋空間とした。一体感をもちながらも、それぞれの古民家の魅力を活かし、建主の期待に沿える癒しの空間となった。

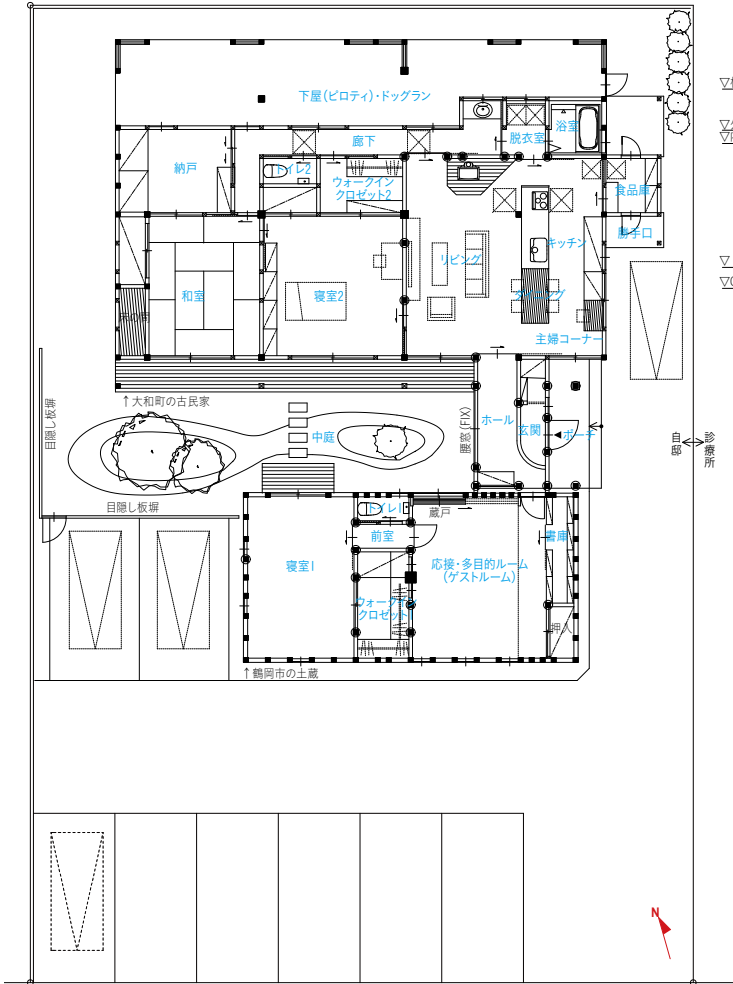


左：和室。既存の床柱はケヤキの新材で330×240mm角。ほかの柱も120mm角のスギの新材。南面の開口上部には排煙のための小窓を設置。をそのまま利用している。

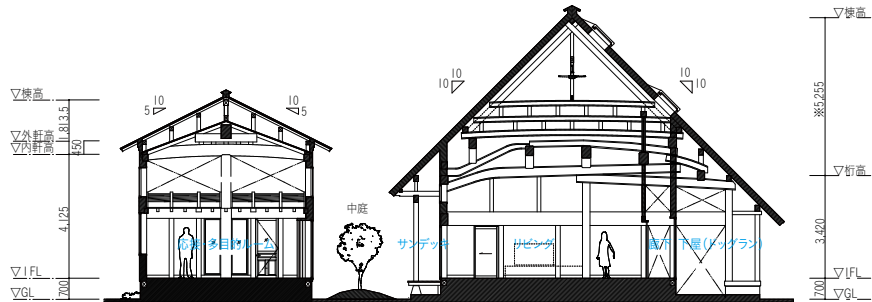


母屋既存寸法図

既存の状態を実測した最初の現地調査図面。間取りや使用されている木材の種類や寸法などが書き込まれている。平面からは分からない梁組断面の略図をメモしている。



配置平面図 縮尺1:250



断面図 縮尺1:250

所在地／宮城県名取市
 主要用途／専用住宅
 家族構成／夫婦

ササキ設計 担当/佐々木文彦
 施工 —————
 興建ハウジング 担当/佐藤洋
 構造・構法 —————

基礎／へた基礎

軒高4.825m 畳高の高さ0.850m

建築面積 262.88m²
(建蔽率36.93% 許容60%)

1階 241.40m²

工事期間 2012年3月～2013年5月

地域地区 法第22条地域
道路幅員 南4.0m 駐車台数 8台

屋根／ガルバリウム鋼板
外壁／漆喰壁仕上げ 一部窯業系サイディング張り、一部スギ板縦張り、一部ガルバリウム鋼板張

ルミ) + LOW-Eペアガラス

店 / 無印良品 11:45 ~ 15:

天井／漆喰調エマルジョンペイント

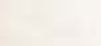
空調 冷暖房方式／エアコン

換氣方式／第三種換氣

排水方式/公共下水道

特記なき撮影／
スタジオ モノリス

A photograph of a traditional Japanese building with a green tiled roof. A blue tarp is draped over the entrance area, and a person is visible standing near the doorway. The building appears to be a residence or a small shop.



4

1：移築再生前の大和町の古民家。 2：仕上げを取り払い、露わとなった木組みの架構。この段階で組み方の番付をしていく。 3・4・5：地組みの過程。番付した古材の組み方や不足材の確認をする。地震で長柄（ながぼろ）等が折れて使えなくなった柱を新材に替える際、場所ごとの矩計寸法を確認する（うなりのある梁を使うにはその場所ごとに柱の長さをかえる必要があるため）。



6



6・7：上棟の様子。既存の柱も傷んでいないものは洗って磨きをかけ生かしている。屋根の瓦は新たに葺き替える。 8：竣工後の外観。

現代の生活に合わせて生まれ変わる被災古民家
農家の地主である建主は、住まいを東日本大震災により被災し、大規模半壊と判定されていた。公費で解体できることもあり、ハウスメーカーや工務店に建替えの相談をしていたが、これまで長い間住んできた築130年の農家住宅と違い、提案される新築住宅がどうも肌に合わないと感じていた。母屋にも愛着があり、古材を再利用するだけでもよいのでなんとか残せないかと模索していたところで、私に連絡を下された。

建物は、庭と駐車スペースを確保するため、現

状から5mほどセットバックするようなかたちで同敷地内での移築再生となった。間取りは、吹抜けとインナーテラスのある開放的なLDKを中心に、夫婦とお母様の寝室を西側に配置し、東側には収穫した野菜を外で洗えるような下屋スペースと、犬の家、土間の多目的ルームを配置した。2階には遠くに住む娘さんといつでも一緒に住まえるように個室とくつろぎスペースを配置した。

屋根は元は寄棟だったが、南に向かって開けた空間とするため、大屋根の切妻とし、下屋スペー

スまで覆う伸びやかな屋根となった。今回は、間取りを大きく変更したため、柱はすべて新材とし、梁、桁、小屋組みは古民家材を再生させた。プランニングには1年近くを費やし、建主と私の長い共同作業で生まれた住宅だ。築130年の民家を再生したいという想いに出会うことができた。

LDK上部の小屋組を見渡す。屋根を既存の寄棟から大屋根の切妻とすることでテラスまで一連の屋根で覆っている。

大屋根の家

所在地／宮城県仙台市
主要用途／専用住宅（農家住宅）
家族構成／祖母、夫婦

ササキ設計
担当／佐々木文彦

施工 栗駒建業

担当／菅原富士夫

構造・構法

主体構造・構法／木造軸組工法

基礎／べた基礎

規模

階数 地上2階

軒高 6,280mm 最高の高さ 7,613mm

敷地面積 3,636.12㎡

建築面積 2,57.37㎡

（建蔽率13.62％ 許容60％）

延床面積 282.45㎡

（容積率12％ 許容100％）

1階 233.08㎡ 2階 49.37㎡

工程

設計期間 2012年3月～2014年3月

工事期間 2014年6月～2015年5月

敷地条件

地域地区 法第22条地域

道路幅員 南9.54m 駐車台数 2台

外部仕上げ

屋根／陶器瓦 平葺き

外壁／ソトン壁仕上げ 一部サイディング張り

一部ベイスギ（ナチュレウォール）張り

開口部／アルミサッシ（内側：樹脂、外側：アルミ）+LOW-Eペアガラス

内部仕上げ

リビング ダイニング キッチン

床／オークフローリング

壁／珪藻漆喰塗り

天井／杉板張り

設備システム

空調 冷暖房方式／エアコン

温水式床暖房

換気方式／第三種換気

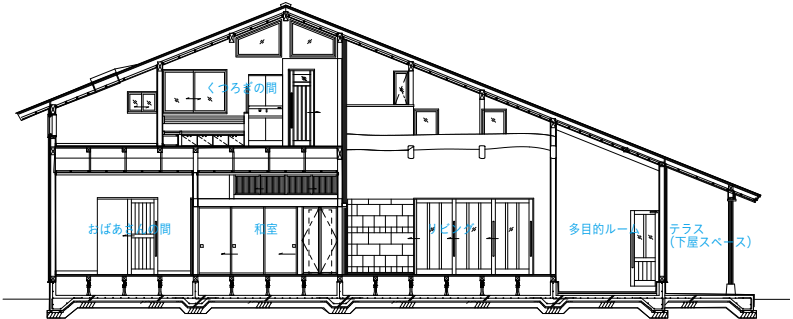
給排水 給水方式／直結式

排水方式／公共下水道

給湯 給湯方式／ガス

——特記なき撮影／

今野貴之／フォトスタジオ モノリス



断面図 縮尺1：200



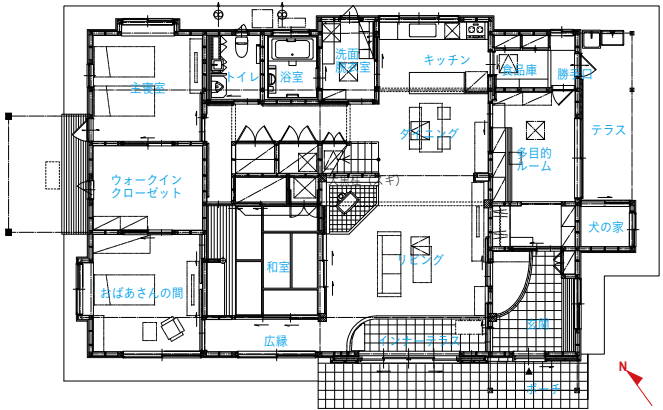
上部の吹き抜けたりリビングは和室、ダイニングとの境界の長押の高さによって重心をコントロールしている。



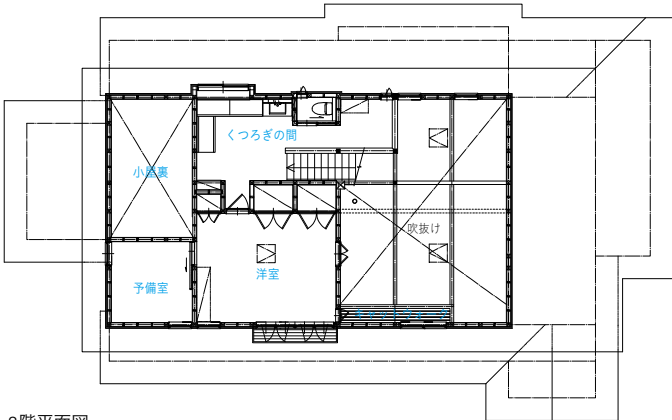
北側外観。外壁は2階をベイスギ張り、1階をそとん壁で仕上げている。



多目的ルーム。玄関とも一続きでテラスにも面する土間空間。



1階平面図 縮尺1：250



2階平面図

大屋根の家
宮城県仙台市